都留文科大學報

Vol.150
December.
2022

学報150号の軌跡

フィールド･ノート20年の軌跡

新型コロナ禍における大学の対応

都留文科大学イメージアップ事業
～富士山プロジェクト2022

夏季休業を利用して学外で学ぶ
教育実習報告／新任教員紹介
講演会だより／文大だより／ぶんだい堂

提供：写真部

TSURU University

学報150号発刊記念特集

学報150号の軌跡

今号で 150 号を迎えた本学の広報誌。
発刊からこれまでの歴史を振り返ってみましょう。

【創刊号】 昭和49年1月

Ｂ５版４ページで、手作り感のある冊子でした。発刊にあたり、当時の下泉重吉学長は「これは学生諸君にも教職員各位にも同じように学内の事情を知ってもらう為であります。わが大学の動向を知り、考え行う正しい資料として役立てて頂きたいのです。」と記しています。

昭和 52 年
図書館(現：４号館)
完成

現在の４号館

平成 16 年　都留文科大学
附属図書館新館　完成

現在の都留文科大学
附属図書館新館

【第86号】 平成15年11月

表紙が目次を兼ねるように。内容も充実し、読み物としても読みごたえのある内容になっています。

【第83号】 平成14年3月

卒業生全員の卒業論文題目掲載がスタート。ページ数も 20 ページ以上に増え、さらに内容が充実。

平成７年
３号館　完成

現在の３号館

平成 16 年
都留文科大学前駅開設

【第100号】 平成18年3月

大学報第 100 号記念特集として、「都留文科大学を考える」と題した座談会を掲載。座談会では、当時の金子博学長、鳥居明雄学生部長、後藤道夫企画室長、武居秀樹助教授(司会･広報委員)の４名が、大学の現在にいたる経過と将来について語っています。

【第110号】 平成21年6月

表紙・裏表紙が白黒からカラー印刷に。表紙が目次の役割も兼ねるレイアウトは継続された。

【第13号】　昭和53年７月

【第19号】　昭和55年６月

その後、写真も多く取り入れられ、徐々にページ数が増加。19号以降は、10ページ前後で構成されていました。
昭和50年代～平成初期は施設整備が進んだこともあり、校舎などの新しい施設の整備計画や状況報告、完成報告が多く掲載されています。

昭和 57 年
自然科学研究棟　完成

現在の
自然科学研究棟

現在の音楽棟

昭和 60 年
音楽棟　完成

【第59号】　平成5年12月

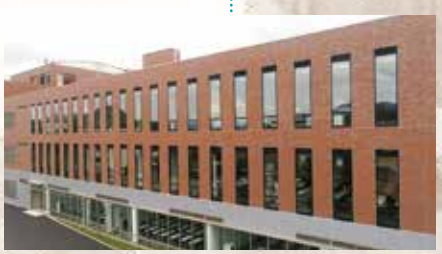
これまでのＢ５版からＡ４版に変更。文字や写真が大きくなり、読みやすくなった印象。

現在の２号館

平成元年　２号館　完成

平成４年
コミュニケーションホール　完成

現在のコミュニケーションホール



平成 29 年　５号館　完成

平成 28 年
国際交流会館　完成

【第134号】　平成29年7月

全ページカラー印刷になり、レイアウトも一新。明るくポップな印象に。

【第150号】　令和４年12月

地域交流研究センターと『フィールド・ノート』

20年の軌跡 FIELD NOTE

2003 年、地域交流研究センターが発足しました。都留文科大学と地域をつなぎ、地域づくりのさまざまな活動と研究に取り組むための拠点として設置されました。『フィールド・ノート』の活動も発足から 20 周年を迎えました。学生が主体となり、都留の自然と文化をさまざまな視点で記録し続けています。

編集部員には次のことを記していただきました
❶ おすすめのバックナンバー
❷ あなたにとって『フィールド・ノート』とは

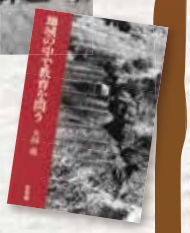
20 ANNIVERSARY

1983 フィールド・ミュージアム構想のはじまり

1983

2つのミュージアム構想

地域交流研究センター発足には長い前史があり、さまざまな実践と構想が生まれました。大田堯（たかし）元学長による「都留自然博物館」構想や今泉吉晴本学名誉教授による「都留市フィールド・ミュージアム」構想もその一つです。この両氏による構想は、現在の地域交流研究センターが推進する「都留フィールド・ミュージアム」の実践・思想の原点となっています。



上：1980 年代のムササビ観察会の様子（石船神社）
右：わたくしの「都留自然博物館」という章が収められている大田堯著『地域の中で教育を問う』新評論、1989

2002 第 6 号

高橋杏佳（地域社会学科）

❶ 自然科学棟でのテントウムシの越冬と、モズのハヤニエの記事が掲載されています。以前、私もそれらの生きものの様子を観察しました。数は年々減少しているそうですが、20 年前の記事からもそのことが分かります。自然の変化に気づけたのも、「記録」してきたことのよさだと感じました。　❷ 都留の楽しさを自ら発見していく活動です。

2003 第 11 号

渡邊結佳（国文学科）

❶ 特集「路上観察」では、編集部員が都留で見つけた憩いの場を紹介しています。そこで感じる心のやすらぎや、大自然に囲まれる贅沢さを私たちに伝えてくれます。都留をもっと好きになれる特集です。
❷ 人や自然の素敵なところを再発見できる場所です。

2003 地域交流研究センターの発足

2003

地域交流研究センター発足

地域交流研究センターは、地域での地道な諸実践やそこから生まれた理念を大切に継承し、発展させていきたい、という考えのもと発足しました。

地域交流研究センター発足当時のパンフレット▶

▲2003 年から 2018 年まで発行された『地域交流センター通信』

『地域交流センター通信』発刊

初代編集長の畑潤氏（本学名誉教授）は、「この〈通信〉は、地域交流研究センターの生命というべきものです。その編集をとおして、地域と大学、学生と教職員、専門諸科学、都留文科大学と全国各地あるいは世界、など多面的な質の交流・共同を生みだしていこうと志しております」と記しています。

2004

富士急行線 都留文科大学前駅 展示室開設

都留市の自然や文化を伝えるパネルの展示を駅待合室でおこなっています。学生が中心となり展示を企画・制作しています。

木材を用いた駅舎の展示室

2005 第 29 号

辻口いづみ（地域社会学科）

❶ 特集タイトル「よってけし　都留」のワードに惹かれ、つい手にとってしまいました。最後のほうに 2 人の卒業生を紹介するページがあり、性格やハマっているものなどが赤裸々に綴られていてクスッと笑えます。　❷ 私たちの感性を読者の皆さんと共有できる場所です。

2006 第 38 号

原優希（国際教育学科）

❶ 都留の昔話が 3 つ紹介されています。一見すると不気味に感じる物語ですが、読み進めていくうちに自然と人との距離が今よりもとても近かったことに驚かされます。自然と人との関係性を考えさせられる一冊です。　❷ 小さな気づきを大切にすることができる場所です。

2007 第 48 号

浅井祐音（学校教育学科）

❶ 特集「都留でみつけた海の幸」では、都留のイルカ文化に触れられています。海のない都留で、どうしてイルカが食べられていたのか。人や地域とのつながりに、昔ながらの知恵や工夫を感じました。
❷ 一息ついて、まわりを見わたす場所です。

フィールド・ノート バックナンバー

『フィールド・ノート』はさまざまな視点で都留を記録し続けています

2007 『フィールド・ノート』の印刷所での製本がはじまる

2007

現代 GP 採択

2007 年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」に採択されました。この採択を契機として、『フィールド・ノート』の印刷所での製本化や「ムササビライブカメラ」、地域の自然や生活の記憶を収集・保存し活用する「オープンアーカイブ」が実現しました。

2008 第 54 号

村井開（地域社会学科）

❶「歩く」記事が並んだ特集です。大月・河口湖間を歩きぬく記事では、イラストとともにその様子が鮮明に書かれており、一緒に歩いた気分になれます。スマートフォンではなく、紙の地図を片手に歩く良さがわかりました。　❷ 4 年間の都留での暮らしを有意義にする存在です。

2009 第 62 号

佐藤優美（国文学科）

❶ 特集「手は語る」では、花を育てるおばあさんや職人など、さまざまな「手」の記事を読むことができます。私の「手」がこれからどうなるのだろう。どんなことを私に語るのだろう。じっと「手」をみたくなりました。　❷ 自分について、じっくり考えることができる場所です。

2010

大哺乳類展に出展

国立科学博物館と本学との共催による「大哺乳類展」では、本学の学生も解説員として活躍しました。開催期間中の入場者は、30 万人を超え、展示室は交流の場ともなりました（2010 年 3 月 13 日〜6 月 13 日）。

2011 第 71 号

阿部くるみ（地域社会学科）

❶ さまざまな「とる」を切り口にした特集です。都留の風景を撮る、自然を採る、そして記録を取っていくことで新たな発見がありました。表紙をはじめとした、秋の色を感じられる写真にも注目してほしい一冊です。　❷ 初心を忘れないでいられる大切な場所です。

2014 第 83 号

長岡芽依（国文学科）

❶ 自然の魅力を存分に知ることができる一冊です。今は無くなってしまった学内のビオトープの記事があり、当時とても大切にされていたことに心が温かくなります。移り変わる自然の一瞬一瞬を心に留めていきたいと思いました。　❷ 個性を大切にできる場所です。

2016 都留文科大学4号館に地域交流研究センターが移転

2015 第 95 号

原口桜子（学校教育学科）

❶都留の気になる看板のお店を特集しています。店名に込められた思いや店の歴史が看板につまっていることに魅力を感じ、この号を選びました。まちでふと見かけた看板から、店のたたずまいや店主の人柄を想像したくなります。　❷ 見知らぬ土地や人と自分の距離を近づけてくれるものです。

2020 第 106 号

西佐和子（比較文化学科）

❶ 新型コロナウイルスの影響により、初めて緊急事態宣言が発令された年の冬に発行された一冊です。思うように取材ができない状況であっても、前向きに変化を楽しもうとする姿勢に勇気づけられました。
❷ あらゆるものに関心をもつ機会を与えてくれる存在です。

2022 第 111 号

渡邊唯（地域社会学科）

❶ 20 周年の記念号です。記念企画では本誌の歩みを振り返りました。私たちの活動が多くのかたに支えられてきたことを実感し、私たちも未来のために丁寧に今を記録していこうと気持ちを新たにしました。
❷ 自分の体験を通して都留をより深く知ることができる場所です。

2022

地域交流研究センターの表示サインが誕生

発足から 20 周年を迎え、地域交流研究センターの表示サインが誕生しました。英語表記は、「Research Center for Community Collaborations」。自然もコミュニティーの一員と捉え、自然と人間の共生を含む協働のありかたをともに考えていきたい、という想いを込めました。

『地域交流センター通信』に込められた想いを受け継ぎ、『TSURU FIELD MUSEUM NEWS』を発刊しました。地域交流研究センターでは地域におけるさまざまな活動を展開しています。これからも地域と大学をつなぐ拠点として、都留文科大学らしい特色ある交流と活動を推進していきます。

特集

新型コロナ禍における大学の対応（連載）

令和２年（2020 年）２月より日本でも感染が広がった新型コロナウイルス（COVID-19）の流行により、日本国内の大学においても入試、新学期開始などに大きな影響と変化が起こった。都留文科大学においても、３月よりさまざまな対応が断続的に起こっている。都留文科大学学報は大学の記録誌としての性格をもち、後世に対して「都留文科大学」を伝える役割がある。今事態は推移している中ではあるが、新型コロナウイルスへの対応を後日振り返るための記録として、特集を組みたいと思う。新興感染症の流行は長ければ数年にわたるもの（スペイン風邪では２年～３年）であり、本特集は著者を変えて今後断続的に報告をおこないたい。

留学状況報告

国際教育学科　講師
木下　慎

国際教育学科では、毎年、独自の交換留学制度 T-SAP（Tsuru Study Abroad Program）を実施し、北欧等の協定大学から留学生を受け入れるとともに、本学科の学生を派遣してきました。しかし、2020 年度と 2021 年度の 2 年間は、新型コロナウィルスの感染拡大を受けて交換留学を中止せざるを得ませんでした。留学を心から楽しみにしていた学生たちにとっては深い喪失体験であり、大学としても苦渋の決断を迫られました。国際教育学科の交換留学を中断していた期間には、カナダやオーストラリアの教育機関と提携し、オンライン語学留学のプログラムを提供し、交換留学の代替プログラムを提供するよう努めました。さらに 2021 年度には、北欧協定大学の現地学生とのオンライン交流会に加え、各大使館の関係者と連携して、デンマーク、スウェーデン、フィンランドの文化に関するオンラインセミナーも実施しました。オンラインセミナーには本学の学生に加え、一般の方々や高校生にも広くご参加いただきました。

留学準備を進める学生

とはいえ、これらの代替的なプログラムが実際の交換留学の代わりとなるわけではなく、現地に留学したいという学生たちの強い思いは残り続けました。そして遂に、2022 年度から、新型コロナウィルスワクチンの普及状況などを踏まえて、国際教育学科の交換留学プログラムを再開するに至りました。本学の安全ガイドラインに従って、受入と派遣の両方のプログラムを 2022 年度前期より再開しています。

今年春には、2020-2021 年度に留学できなかった国際教育学科の 3 期生、4 期生の留学希望者を対象に、北欧等への交換留学を実施しました。留学期間は協定大学の Spring semester に当たる 2022 年 1-2 月から 5-6 月にかけてです。コロナ禍による中断後、はじめての留学再開ということで、学科としても学生の感染予防の徹底に努めました。渡航の１ヶ月前には毎週のように留学予定者で集まり、留学先地域の感染状況に関するリサーチ活動をグループで行い、専門家による危機管理セミナーも実施しました。2022 年度前期にはデンマークへ 14 名、スウェーデンへ 2 名、フィンランドへ３名、ベルギーへ３名、合計 22 名の学生を送り出しました。そのなかでも新規協定校であるベルギーの VIVES 大学（VIVES University of Applied Sciences）へは今回が初めての派遣となりました。現地の授業が一部、オンラインで実施されるなど、コロナ禍ならではの苦難がありながらも、全員無事に留学プログラムを

終えて帰国することができたことは、大きな一歩となりました。

これら春の派遣と並行して、交換留学生の受け入れも再開しました。政府による突然の国境管理緩和の通知にもかかわらず、留学を待望し、最後まで粘り強く留学の可能性を探ってくれていた3名の学生が来日を果たしました。2022年度前期の交換留学生は、スウェーデンのウプサラ大学から2名、ベルギーのVIVES大学から1名です。いずれの学生も積極的に授業に参加して学業に励むとともに、授業内外で本学の学生と広く交流を図りました。なかでも、幼児教育を専攻しているスウェーデンの学生は、コロナ禍にもかかわらず、都留市のひまわり幼稚園に教育実習を受け入れてもらい、貴重な経験を積むことができました。

さらに、今年度後期には、本学科の正規の留学年次である2年生を中心に、合計56名（2年生40名、3年生12名、4年生4名）の学生を北欧等の協定大学へ留学に送り出しています。留学期間は現地のAutumn semesterに当たる2022年8-9月から2022年12月/2023年1月にかけてです。デンマークに34名、スウェーデンに6名、フィンランドに5名、リトアニアに3名、ベルギーに8名、派遣しています。このうち、リトアニアのVIKO大学（Vilniaus kolegija / University of Applied Sciences）とベルギーのHowest大学（Howest University of Applied Sciences）へは、今回がはじめての派遣となりました。本来の留学年次である2年生に、コロナ拡大の影響で留学に参加できていなかった3-4年生が加わることで、学科の交換留学としては過去最大の規模となりました。できるかぎり多くの学生に留学機会を保障するため、インターナショナルコーディネーターを中心に、派遣の定員数について協定大学と粘り強く交渉を行いました。また、留学再開後2度目の派遣になるとはいえ、新型コロナの感染対策には引き続き最大限の注意を払いました。渡航前の留学準備では、前回の派遣と同様、毎週のように集まり、留学先の感染状況に関するリサーチ活動を行い、専門家による危機管理セミナーも実施しました。また、春学期に留学していた学科の先輩から留学経験談を直接聞く機会を設け、渡航に向けた心の準備も行いました。

これと並行して、2022年8月末から後期の交換留学生の受入もスタートしています。2022年

留学生オリエンテーションの集合写真

前期は受入人数が3名にとどまっていましたが、後期には22名の留学生を受け入れています。デンマークから16名、スウェーデンから4名、ベルギーから2名の留学生が来ています。受入人数を見ても、いよいよコロナ前の留学プログラムに迫る規模に回復してきています。留学生には教員志望の学生も多く、都留市の都留興譲館高校や富士吉田市の富士学苑中学・高等学校へすでに学校見学に行っている学生もいます。授業のみならず、剣道や茶道の部活動に参加するなかで、学校文化の違いについて学びを深めている様子でした。

以上に加えて、国際教育学科では教育実習だけに参加する留学生の受入も進めています。2022年11月から順次受け入れを再開する予定で、現時点ではデンマークから10名の留学生を受入予定です。教育実習校としては東京のアオバジャパン・インターナショナルやドルトン東京学園、富士河口湖のマリア国際幼稚園などにご協力をいただいています。

最後になりましたが、国際教育学科の交換留学プログラムを再開するにあたってご協力を賜った関係者の皆様へ、厚く御礼申し上げます。新型コロナの感染拡大という未曾有の危機を経て、このように交換留学の再開へ漕ぎ着けることができたのも、学生や保護者をはじめ、協定校、実習校、関係部署の方々のご理解とご協力があってに他なりません。本学科の交換留学に参加した学生たちの学びを様々な形でご支援くださり、誠にありがとうございます。

あらゆる困難にもかかわらず、学びを止めない学生たちの姿には日々敬服するばかりです。危機の時代にこそ、学生も教員も「なぜ学ぶのか」が問われているのだと思います。諸々の事情もあって留学に参加できなかった学生たちの想いも胸に刻みつつ、本学科の留学プログラムが学生たちにとってこれからも実りあるものであり続けることを願っています。

新型コロナワクチン職域追加接種について

本学における新型コロナワクチン職域接種事業を円滑に進めるため、令和３年６月に結成した大学事務局ワクチン班は、令和４年５月21日、６月18日、７月２日の３日間、新型コロナワクチン職域追加（3回目）接種を実施し、学生・教職員合わせて990人が接種しました。

新型コロナワクチン職域追加（3回目）接種は、「第６波」と「第７波」の間に実施されましたが、「第６波」がピークアウトしたこと、比較的若者は重症化しないとされていたこと等も影響し、その接種人数は、第１回目接種1474人（令和３年度９月実施）、第２回目接種1468人（令和３年10月実施）と比べて大幅に減少しました。

大学等における職域接種は、大規模接種や個別接種を担う自治体等の負担を軽減する目的で実施され、実施医療機関の確保もすべて独自で行う必要があります。今回も初回（１回目、２回目）接種と同様に、山梨大学医学部附属病院の協力により、都留文科大学キャンパスで職域接種を実施することができました。本学の力だけでは不可能な事業であり、あらためて社会との繋がりの大切さを思い、ご協力いただいた山梨大学附属病院感染制御部のスタッフ並びに関係部局の方々のご尽力にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

また、先般、厚生労働省から、オミクロン株に対応した新型コロナワクチンの職域追加接種の開始について通達があり、早速、山梨大学医学部附属病院に職域接種への協力を仰いだところ、ご快諾していただきました。現在、大学事務局ワクチン班では、オミクロン株に対応した新型コロナワクチンの職域追加接種実施（令和４年12月３日予定）に向けて準備を始めたところです。

新型コロナワクチンは、新型コロナウイルス感染症の発症を予防する高い効果があり、感染や重症化を予防する効果が確認されています。まだ、終息の見えない新型コロナウイルス感染症ですが、今後も職域接種等を推進し、本学の学生が、活気あるキャンパスライフを享受できるよう、教職員一同で支援していきます。

（大学事務局 ワクチン班）

2022年夏――新型コロナウイルス感染症 第７波を越えて

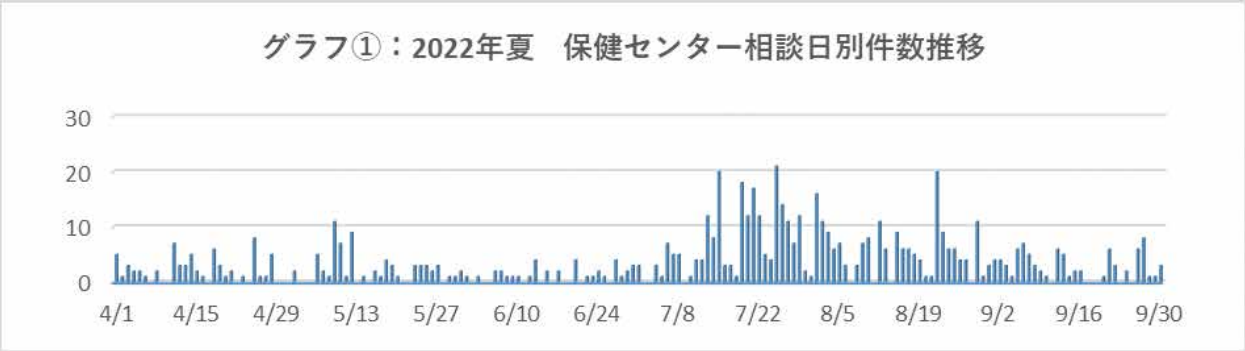
新型コロナウィルス感染症対策本部
対策チーム〈学生部門〉リーダー
保健センター長　加藤 めぐみ

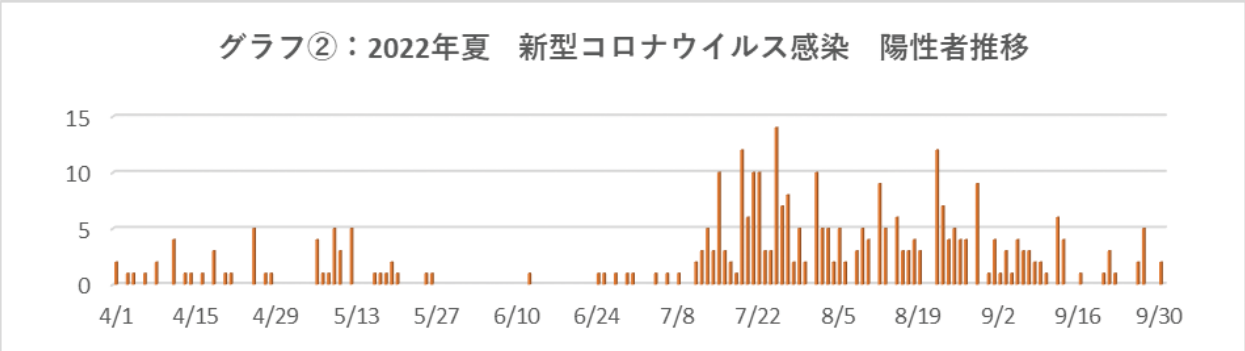
コロナ禍に入って２年目の 2022 年夏、オミクロン株が猛威を振るい、それまでとは桁違いのレベルでの感染拡大、いわゆる第７波が押し寄せてきた。都留文では４月からスタートした対面授業で大きな混乱もなく、夏からの合宿、海外研修の再開に向け準備を整えようとしていた矢先のことであった。８月末には１日の全国の感染者数が 20 万人を超え、都留文でも最大で１日 14 名の感染者が確認されるという想定外の事態となった。

保健センターは、連日電話相談に追われた。「相談件数の推移」はグラフ①、「陽性者数」はグラフ②の通りである。相談内容は、医療機関受診相談、処遇確認、受診後の症状相談、不安相談と多岐にわたった。相談件数が一日 20 件とあっても、実際には一日中、対応に追われっぱなしという状態になった。学生一人一人の「医療機関紹介」「症状確認」「検査結果及び処遇の確認」まで行うことは困難となり、回答フォーム Forms を活用することで電話の件数を大幅に減らした。授業・教育実習については教務・教職担当と、海外の研修先での感染に関しては国際交流センターなどと連携して対応にあたった。

保健センターは感染「予防」が最優先課題であることから、陽性となった学生から感染経路の情報を収集し、接触した可能性のある者への注意喚起は感染者本人に依頼した。医療機関のひっ迫で、すぐに病院を受診できないケースも増えた。また療養でアルバイトも出来ない学生にとっては、医療費・タクシー代の負担が大きいため「医療費申請」をすすめている。交通手段のない学生を医療機関まで搬送するため、感染対策を講じたタクシー会社と契約し、学生の送迎をお願いした。学生をアパートまで迎えに行き、そのまま帰りもアパートまで送っていただいたドライバーの方々には心から感謝している。

コロナ対応を最優先に行った日々は忙しいながらも、多くの方の優しさに触れる機会ともなり、センター内の結束も強まった。とはいえコロナの終息がひたすら待ち望まれる。





都留文科大学イメージアップ事業

「富士山プロジェクト2022―つるのひと越え―」

富士山プロジェクト2022 実行委員会
代表　加藤 めぐみ
（学長補佐・文学部英文学科教授）

コロナ禍を越え、映画・自然・音楽・演劇・文学を通して人々がふたたび集えたら――　そんな願いを込めて、2022 年秋、「富士山映画祭」「富士山学講座」「富士山音楽祭」「富士山文学祭」の四つの祭典、７つのイベントからなる「富士山プロジェクト 2022」を、都留文科大学キャンパスおよび都の杜うぐいすホールの大小のホールで開催した。

マスク越し、オンライン越しでしか人や世界とつながることができない不自由な日々が続くなか、ポスト･コロナ時代への「希望」として、2021 年夏、「都留文科大学イメージアップ事業」のアイデア募集の呼びかけがあった。そこで提案し、採択されたのが本プロジェクトである。ローカルからグローバルへ、都留から世界へ――「富士山プロジェクト 2022」では都留文科大学、富士山を起点として世界に広がる文化的、学術的ネットワークをひとつに結集し、「つるのひと越え」と題して、コロナ禍を越え、言語、ジャンル、ジェンダーの壁を越え、また国境を越えていくことを目指した。

８人の本学教員からなる実行委員会を中心にすすめられた本プロジェクトは、理事長、学長、事務局長はじめ教職員、卒業生、学生、都

1 富士山映画祭

10月22日（土）　13：00 － 17：00
２号館１０１教室

「都留からカンヌへ『雲の上』『典座－ TENZO －』上映会＋ アフタートーク」

富田克也（映画監督）河口智賢（耕雲院副住職）つるっ子プロジェクト

聞き手：瀬尾尚史（本学特任教授）

富士山映画祭では、『雲の上』(2003 年) と『典座 -TENZO-』(2019 年) という、都留を舞台にした２本の作品が上映され、富田克也監督と都留市耕雲院の河口智賢副住職を迎えてのトークセッションが行われた。富田監督の初長編である『雲の上』は、寺の跡取り息子チケンが主人公で、監督の従弟にあたる河口氏がモデルとなっている作品である。その河口氏が製作・主演を務め、再び耕雲院を舞台に撮影されたのが『典座』であり、この作品はカンヌ映画祭の批評家週間の特別招待作品としてワールドプレミア上映された。トークセッションの前半では、カンヌで上映されることになった経緯や、フランスの観客との交流について、更には監督の都留という土地へのこだわりについても話があった。後半では、『典座』のテーマの一つであり、河口氏が取り組んでいる食の安全が話題となった。耕雲院で活動している本学の「つるっ子プロジェクト」の学生たちも加わり、彼らと河口氏との活動について紹介された。

留市の多く皆様の協力を得て、無事成功裡に終わった。6月に公募したコンテストでポスターデザイン賞を受賞した平井しず香さん（地社４年）にはポスター、プログラム、ホームページなどプロジェクト全体のデザインを、英文卒業生の田中吉雄氏が率いるアクトワンのスタッフ、学生サークル PLUS ONE+、写真部にはイベントの運営（照明・音響・記録）を、企画広報担当にはプロジェクトの広報でご尽力いただき、さらに都留市、都留市教育委員会からの後援、富士急グループの協賛を得て、のべ 1000 人近い国内外、県内外からの来場者を得る一大プロジェクトを実施することができた。ポスターが富士急行、街のあちこちに貼られ、山梨日日新聞、読売新聞でも報じられ、都留文科大学のイメージアップに貢献する事業となったのではと自負している。ここに関係者各位、出演者及び来場者に感謝申し上げるとともに以下で各イベントの概要をご報告したい。

2 富士山学講座

10月22日（土）
16：30 － 18：30

「ムササビ観察会」

集　　合：地域交流研究センター
観察場所：今宮神社
講　　師：北垣憲仁
（本学教授・センター長）

地域交流研究センターで 2003 年から行われている「ムササビ観察会」。キャンパスからバスで 10 分ほどの鹿留地区にある神社の境内には樹齢 300 年以上、高さ 30 メートルの市指定天然記念物のケヤキが茂り、そのご神木と呼ばれる大木にできた「洞（うろ）」がムササビの巣で、夜になると近くの森に滑空して食事をしたりする。夜行性のムササビは、日没後、30 分ほどして活動を始める。今回も日没時刻を調べて準備をし、ムササビが滑空する姿を観察することができた。その姿は一度見ると決して忘れることができない。森の雰囲気を味わいながら、生きものや自然の不思議、その感動を参加者たちとわかちあった。

3 富士山音楽祭

10月29日（土） 14：00 − 16：30
都の杜　うぐいすホール 大ホール

《ガラコンサート−世界に響け 歌の輪−》

山本富美（S）向野由美子　梁取里（MS）渡辺正親（T）相田南穂子（R.Org.）立原勇（編作曲）木下真央 十川菜穂（P）清水雅彦（Cond.T）栗田佳苗　保坂杏樹　奥山亜美（P 学生）県立都留高校合唱部　県立吉田高校音楽部　都留市合唱連盟有志合唱団　都留文科大学合唱団

前半は日本の秋を彩る名曲から、世界のオペラ・アリアまで、声楽家、ピアニストとして活躍する都留文科大学教員と卒業生、現役学生による華やかなステージとなった。後半は近郊の高校、都留市合唱連盟有志、12 年連続で全国合唱コンクール金賞を受賞している都留文科大学合唱団の演奏に続いて、クロージングでは全出演者により「富士山賛歌−富士山プロジェクト 2022 委嘱初演（編作曲：立原勇）−」が壮大に歌い上げられた。長年、日本の合唱界を牽引してこられた清水雅彦先生のお声掛けで、大学、学生、市民が創り上げる、高い芸術性と温かみを兼ね備えた夢のガラコンサート（特別演奏会）が実現した。

4 富士山文学祭

11 月 4 日（金） 17：00 − 20：00
都の杜　うぐいすホール 大ホール

《記録映画「多和田葉子の旅する声の記録」》

ソン・ヘジョン（撮影・監督）

多和田葉子の「声」を聴き、その「声」に取り憑かれ、世界を旅する「声」を追いかけたソン・ヘジョンによる 10 年間の記録。米独印日など 10 カ国におよぶ「声のフィールドワーク」には、多和田葉子のことばが、生き物のように本から飛び出て、声となって飛び回る瞬間で溢れていた。今回はソン監督初の長編ドキュメンタリー作品の富士山プロジェクトヴァージョンの上映後、作品に込めた想い、撮影秘話をトークショーの形で伺った。

《言葉と音楽のパフォーマンス「情熱と反復」》

多和田葉子（本学特任教授・詩人・作家）
高瀬　アキ（ジャズピアニスト・作曲家）
中村まゆみ（声楽家・メゾソプラノ）

多和田葉子による「言葉と音楽のパフォーマンス」が都留で行われたのは、2017 年夏の都留国際文学祭の《HOKUSAI》以来 2 回目。あの世のいる北斎とフリーダ・カーロの往復書簡という形で前作から接続された今回の《情熱と反復》では、カーロの絵画からインスパイアされた 11 篇の詩――1 こわい女の子　2 白黒の男たち　3 普通の女の子 4 植物研究家 5 仮面女の乳房 6 大きな手が胸に 7 往復書簡 8 オウム 4 羽 9 ビル雲 10 夫を抱いて 11 メキシコの女たち――の朗読に、高瀬アキの情熱的かつ抒情的なピアノ演奏、さらには大ホールに響きわたる中村まゆみのカルメンの歌声が加わって、渾身のパフォーマンスが披露された。

人類はコロナ禍を越え、新時代を迎えられるのか、と本作は問う。自粛生活で人の間にはディスタンスが、イデオロギー間、国家間には今なお壁が立ちはだかり、世界には戦争と混乱が続いている。そんな状況下でも、ラストでは未来からの明るい光が差すように、市井の

17：00 − 19：00
都の杜　うぐいすホール 小ホール

《英語ミュージカル− Footloose −》

Tsuru Drama Company 演出 中原和樹

FOOTLOOSE is presented by permission of Toho Music Corporation
on behalf of Concord Theatricals, New York City.
www.concordtheatricals.com.

都留国際文学祭 2017 で「なりきりシェイクスピア劇場」として始まった英文学科のグループが、学科を超えた英語ミュージカルの劇団 Tsuru Drama Company に発展。本公演では 1980 年代アメリカの高校生たちの青春を描いた《Footloose》を上演した。英語のみで劇を作り上げる英語教育法 English through Drama は小中高の英語教育への応用も期待される。「自己肯定感を持つ」「壁を打ち破る」「主体的に考え、行動する」という 3 つの軸を持って活動している TDC の「いま、自分たちにしか作れない」瞬間を、感動を、人の心に届けたいという熱い想いが、ひとりひとりのエネルギッシュな演技、歌声、ダンスに漲っていた。

女たちの穏やかな連帯に希望が見出され、「春が来ることを全身で信じている」という結語には、まさに「つるのひと越え」が表現されたようだった。

多和田葉子氏は芥川賞、紫綬褒章、ドイツのクライスト賞、全米図書賞と国内外の数々の賞を受賞。今回は 3 年ぶりの帰国。2022 年は朝日新聞に『白鶴亮翅 (はっかりょうし)』を連載、10 月に講談社から『太陽諸島』が出版され、三部作が完結した。

11 月 5 日（土）　10：00 − 12：:00
5101 教室

《国際学会 日本発「世界文学」ワークショップ》

UN/REAL: Kazuo Ishiguro's Alternative Imagination for 21st Century Living

Sebastian Groes & Max Berghege（University of Wolverhampton）
Alex Goody（Oxford Brooks University）
Megumi Kato（Tsuru University）

本ワークショップは富士山文学祭と同時に早大、東大駒場、LOVOT MUSEUM で 10 月末から行われたプロジェクト “UN/REAL: Anglo-Japanese Perspectives on Virtual Living” の最後を飾るイベントとなった。文学研究者とテクノロジーを担うクリエイターが文学作品を通じて、AI 技術がもたらす未来について語ろうという UN/REAL プロジェクトの都留文ワークショップでは、カズオ・イシグロ『クララとお日さま』（2021）の読みを加藤ゼミの学生たちが発表。その後、Groes 教授、Goody 教授による研究発表が行われた。英仏および学内外の研究者と学生、留学生が集う、極めて国際的な学びの場となった。

国際交流センター主催 短期語学研修

Willingness

英文学科３年
佐藤 真衣

トレイシー先生から「私のクラスにあなたがいてくれてよかった。」と言ってもらったことが忘れられません。

８月８日から29日までの約３週間、カナダのリジャイナ大学で行われた語学研修に参加しました。授業ではディスカッションやゲームを行ったり、カナダの文化や歴史について学んだりしました。私のクラスは他大学の人がほとんどで、誰も間違いを恐れることなく挙手をして発言していました。私はそんなクラスメイトの積極性に圧倒され、最初は様子を伺うことしかできませんでしたが、多様なリアクションをしたり、話を広げたりしてくれた、優しくてあたたかいクラスメイトや担任の先生のおかげで、私も徐々に授業に主体的に参加することができました。英語を使うことの楽しさや達成感を味わえたため、毎日の授業が楽しみで仕方がありませんでした。放課後には現地の学生と交流したり、休日にはリジャイナの名所を巡ったりと、授業以外の活動も豊富でした。

カナダでは、授業だけでなく、日常生活のすべてが学習に変わり、毎日が刺激でいっぱいでした。しかし、短い研修期間を充実させるのには、私たちの自主性・積極性が欠かせません。日本でも失敗を恐れず、何事にも積極的に挑戦したいと思います。カナダで過ごした３週間や出会いは、何にも代えられない、大きな財産です。

夏季休業を利用して学外で学ぶ ～国際交流センター～

国際交流センター主催 短期語学研修

付随する物の価値

学校教育学科２年
川上 英寿

私は8/28～9/26までアンジェで過ごした。それは、フランスの教育に関心があり、それに付随する文化や国風はどのようなものか知りたかったからである。ホームステイでは、私のほかに５人。ここはフランスだよな。と思いながらも、フランス以外の各国の特色を知ることができた。街もどんなに素敵だったかわからない。1,000年の歴史を感じさせる街並み、そして、それに彩られたフランス人の生活を一度に見ることができた。そしてなにより、街を散策しながら、通りに設置されたテラスで、ある人は楽しく、ある人は真剣に話し合う光景を見るのが好きだった。素敵な出逢いもたくさんした。特に、大学の先生が、全身で伝えようとする姿は、教師の概念を取り去るもので、教師のカタチを考え直すきっかけにもなった。そして多くの人が社会的弱者である私を支えてくれた。今では逆ホームシックになっている。この“語学”研修から学んだことは、語学をはじめ、積極性を失わずに挑戦すること、人とのつながりは素晴らしいこと、自分の知っている世界はまだまだ小さいということだ。最後になるが、この素晴らしい時間と空間を提供してくれたすべての人に感謝したい。

陽気な仲間たち

スペイン・サラマンカ大学短期語学研修に参加して

英文学科１年
川尻 夏翠

スペインのクラスの仲間たちと

8 月 30 日～ 9 月 24 日までの約 3 週間、私たちは短期語学研修に参加し、スペイン・サラマンカで生活しました。落ち着いたとはいえ、コロナ禍という普段と異なる状況下で行くことに不安はありましたが、無事研修を終えることができました。平日は現地の大学で 4 時間の授業を受け、休日は観光に行きました。スペイン語の勉強はもちろん、現地の人と交流したり、スペインならではの食事を楽しんだり、文化を肌で感じたりできた、とても充実したプログラムでした。そうした中で友人もできました。授業は全てスペイン語で学びましたし、日常のあらゆる場面でスペイン語をたくさん使いました。そう聞くと、「参加したいけれど、正直スペイン語は得意じゃない」と考えている方は不安になるかもしれません。ですが、大丈夫です。私もそうでした。今はほんの少ししか話せなくても、聞き取れなくても、必ず上達します。研修を終える頃には自分の成長を大きく感じられると思います。スペイン語を勉強し始めたばかりの私にとって今回の研修は大きな挑戦でしたが、貴重な経験ができて本当に良かったです。困ったとき助けてくださった方々にも感謝の気持ちでいっぱいです。¡Muchas gracias!

国際交流センターでは、2022 年の 8 月から 9 月にかけて、カナダ・リジャイナ大学（英語）、フランス・西部カトリック大学（フランス語）、スペイン・サラマンカ大学（スペイン語）、オーストリア・ウィーン大学（ドイツ語）での海外短期語学研修に 45 名の学生を派遣しました。

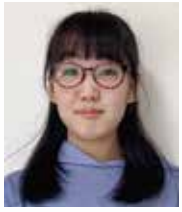
ウィーンで過ごした人生最高の夏休み

地域社会学科３年
秋元 岳斗

私は夏季休業期間に、ドイツ語圏最古で最大規模を誇るオーストリアのウィーン大学で３週間のドイツ語研修プログラムに参加した。授業はレベル別にクラスを分けられ、ドイツ語の知識がない人から上級者まで誰でも参加できるが、全てドイツ語で進められる。ただ伝統あるプログラムなので、レベルに合ったプログラムにより３週間で確実にドイツ語を理解し話す力が鍛えられる。また放課後にはピクニックやハイキングなど様々なアクティビティが用意されており、ウィーンの自然や文化に触れながら各国の留学生と英語やドイツ語で交流することができた。授業のない週末には寮でルームメイトと交流したり、オペラや教会、カフェなどのウィーンの文化に触れたり、中欧各国に出かけたりと刺激と発見に溢れた楽しい時間を過ごせた。しかし研修中は楽しい事だけではなく、言語の壁に苦しみご飯も食べられないほど辛い瞬間もあった。ただそれを乗り越えた時には、確かな自信と成長を得られたと実感できた。貴重な夏休み返上で３週間ドイツ語を勉強することになったが、新たな世界・成長した自分と出会え、おいしいビールと共に人生最高の夏休みをウィーンで過ごせて本当に良かった。

クラスメイト達と

四日市での環境社会学ゼミ合宿



現地調査にて「生の声」や フィールドから生まれる経験

地域社会学科４年
佐々木 綾香

環境社会学ゼミ（神長唯先生）は８月18日から20日、３年ぶりに四日市でのゼミ合宿を実施しました。私は「フィールドワークⅢ」に引き続き、環境社会学ゼミに所属したものの2･3年次はコロナ禍のために学外実習は断念せざるをえませんでした。今回、引率補助のTAとして、３年生と参加することが叶い、経験値を上げられたと実感しています。

今年は四日市公害判決50周年の節目といえる年です。「四日市公害と環境未来館」では企画展が開かれていました。１日目は青空の下、解説付きで公害被害地域を歩き、語り部の「生の声」をその地で聞く貴重な経験ができました。２日目は、四日市港を一望できる四日市港管理組合の展望台を見学し、夜景クルーズでは工場夜景を見てコンビナートの詳しい話を聞きました。３日目の語り部ヒアリングでは、支援者の思いにふれました。公害の歴史と、観光資源としてコンビナートを利用する、四日市の光と影の２つの面を感じました。

ゼミ合宿を通して、様々な立場から語られる「公害の継承」や「よりよい未来に向けての思い」に接しました。紙の資料やネットの情報だけでは分からない、豊かな学びを得られたのは学生時代の財産です。

公害被害地域から対岸400メートル先のコンビナートを臨む

夏季休業を利用して学外で学ぶ ～地域社会学科～

タイ国・タマサート大学短期留学プログラム

タイ・タマサート大学 短期留学を終えて

地域社会学科２年
北畑 希実

現地のバディとともに世界遺産アユタヤ遺跡を巡り、歴史を肌で感じる

８月31日～９月14日の２週間のタイ滞在は私にとって視野が大きく広がる良いきっかけとなった。今回のプログラムでは、現地の学生とつながり、授業を受け、その土地の人と生で触れ合い、現地の日系企業や起業家の方と関わったりしたからこそ感じられることが多かった。例えば、大学で学習する学生のタイ語と英語を流暢にこなす姿、さらに、日本語学科の学生は、日本語をもこなす姿に驚いた。しかし、一歩大学の外に出てみると、自分より明らかに幼い子どもたちが労働していたり、マーケットで会話をすると、数字やあいさつでさえ、英語では伝わらなかったりする世界が広がっていた。これが格差なのだと感じた瞬間でもある。他にも、日常生活の過ごし方から宗教や文化的な面まで日本を外から見ながら、タイと比較しながら捉えることができた。机上で学ぶことの価値もあると思うが、現地に行くことで感じられることが山ほどあった。

コロナ禍で日本の当たり前が通用しない中、配慮してくださった先生方や現地の学生には本当に感謝している。この経験を日本でも生かしていきたい。

教育実習での学び

国文学科４年　岩　崎　夏　萌

私は、6 月上旬から 2 週間、母校である静岡県の高等学校で教育実習を行った。2 週間という非常に短い実習期間ではあったが、合計 20 回の授業を受け持たせていただいたり、朝礼や終礼、駐輪場当番などの授業外の時間で積極的に生徒と関わる機会を持たせていただいたりしたことで、実りある有意義な教育実習となった。その中で特に印象に残っている学びが 3 つある。

まず 1 つ目は、生徒との関わりの大切さである。私が担当したクラスは比較的大人しかったため、授業の反応が最初から活発だったわけではないが、日頃の細かなコミュニケーションを重ねていく上で授業の反応に大きな変化を感じられた。生徒たちは、反応「しない」のではなく「できない」ということもあって、それは必ずしも授業内で解決できることだけではないのだということを学ぶことができたのだ。また、最後にいただいた色紙の中で「いつもニコニコしていたから話しやすかった」「笑顔な先生の雰囲気がやわらかくて授業が受けやすかった」など、笑顔について褒めてもらえたものが多くて、今のご時世でマスクは外せないし、そんなに表情を見てもらえているとは思っていなかったので、とても嬉しかったと同時に「そういうところも見られているんだな」と驚いた。表情にも気を配って生徒が関わりやすい空気をつくることの大切さも学ぶことができた実習であった。

次に 2 つ目は、同じ教材でも授業の組み立て方次第で内容は大きく変わるという事だ。今まで何気なく受けていた授業にはさまざまな工夫があって、50 分の中でどこに重みを持たせるかで授業のテーマはガラリと変えられるということを、自分が授業をさせていただく中でも、同じ教材で他の先生が授業しているのを見学させていただく中でも感じる事ができた。また、ただ知っていることを 1 から 10 まで全て伝えるのがいい授業ではなく、流す部分としっかり時間をかけてみんなで考える部分のメリハリをつけることの大切さも学んだ。

最後に 3 つ目は、学ぶ姿勢を持ち続けられる教員の魅力についてである。私は今回実習生であったため、学ぶ立場なのは当たり前のことだが、私が jam board というアプリを授業で使おうと試みた時、教科指導の先生が「私にもそれ教えてほしい」と仰ったことにとても驚いた。どんな立場になっても自分に足りないところを伸ばそうとする意識は、生徒のためでないと持ち続けられないし、「ここまでで私は完璧だ」と思ったらそこで成長は止まってしまうのだと、改めて気づかされた機会であった。

これらの多くの学びを 2 週間の中で得られたのは、熱心に指導してくださる先生方や、真摯に向き合い協力してくれた生徒たちがいたからだ。何か壁にぶつかろうとも、まずは自分自身が誠実に人と向き合い、努力し続ける事ができれば、周りから手を差し伸べてもらえる人になれるのだということを実感した実習となった。これから教員になっても、常に現状に満足する事なく、学び続ける姿勢を忘れずにいたい。

最終日に生徒達からのサプライズで色紙やプレゼントをいただいた時の様子

教育実習で学んだこと

英文学科４年　橋　口　小　夏

私は９月中旬から３週間、母校の中学校で教育実習を行いました。教育実習に行く前は、担当するクラスになじめるかどうか、授業がうまくできるかなど、たくさんの不安がありました。一方で、実習期間中に体育大会が開催されるため、クラスの生徒と一緒に参加できることをとても楽しみにしていました。そんな不安と期待を胸に、教育実習に臨みました。

私が担当したクラスは２年１組でした。生徒たちは、授業中、清掃の時間、朝の会、帰りの会など、集中するべきところは集中して取り組むことができ、休み時間は明るい雰囲気で過ごしています。私が生徒たちに積極的に話かけていると、数人が話しかけてくれるようになり、すぐに仲良くなることができました。体育大会の練習が始まると、私も生徒と一緒に応援の舞踊を覚え、練習に参加しました。すると、それまで会話をするきっかけのなかった生徒とも一緒に練習し、仲を深めるきっかけとなりました。そして、２年生の団体種目を一緒に練習をしているうちに、生徒たちがどのようなことを聞いて、考え、実行しているのかなんとなく分かってきた気がしました。まずは教員も生徒と一緒にやってみることが、生徒理解への第一歩だと学びました。体育大会当日には、応援、学年２種目共に１位を取ることができ、生徒たちと一緒に喜び合うことができました。

道徳の授業の様子

また、指導教諭の先生方から学ぶことがたくさんありました。先生のお話の中に「生徒に移動を早くするようにと呼びかけているのなら、先生が生徒の誰よりも早く移動しなさい。生徒は先生のことをよく見ている。」とありました。体育大会の準備期間中、移動教室が多かったのですが、できるだけ早く移動することを心がけました。また、授業に遅れないようにする、忘れ物をしないようにする、など生徒に呼びかけることを、教師が実行するところを見せることが、生徒の前に立つ教師として大切なことだと学びました。

体育大会が終わり、私の研究授業の準備が始まりました。私は英語と道徳の授業を１時間ずつ受け持ち、指導教諭の先生方に、朝や放課後など、忙しい時間の合間を縫って指導していただきました。先生が指導してくださったことの中に、「生徒との関係性がうまくいっていれば、授業もうまくいく。」という言葉がありました。その言葉を胸に、生徒が学校にいる間は授業準備をするのではなく、生徒とコミュニケーションを取ることを心がけました。そして迎えた本番。英語も、道徳の授業も、自信がない故に声が小さくなってしまったり、黒板の字が薄かったり、準備不足を感じる授業となってしまいました。授業の後、たくさんの先生方からご指導をいただきました。今の私では、すべてを取り入れることは難しく感じますが、取り入れられることから徐々に改善していきたいです。

３週間という短い期間ではありましたが、先生方、そして生徒たちから多くのことを学びました。私を実習生として受け入れてくださった校長先生を初めとする先生方、そして生徒たちへの感謝を忘れず、今後も学び続けていきます。

教育実習を終えて

国際教育学科４年　有　村　龍　也

５月末から３週間、母校の高校で教育実習をしてきました。今回、「生徒を理解するために積極的に交流を図る」、「今まで学んできたものを十分に活かしながら、自分なりの教師の役割というものを見つけたい」という目標を立て、実習に臨みました。私は実習期間中、生徒や先生方から多くの刺激をもらいながら、過ごすことができました。ここでは、1週ごとに分けてお話したいと思います。

まずは、緊張に多く悩まされた第１週目。積極的に交流を図るどころか、生徒の前で焦ってしまう事態に…。それでも、少しずつ生徒たちの方から声をかけてくれて、日常的な話で盛り上がってうれしかったあの感覚を今でも覚えています。このままではダメだと思い、たとえ軽くあしらわれても無視されても、多くの生徒に話しかけようと思いました。数人と話しが盛り上がると、その周りの生徒も一緒に盛り上がってくれて、改めてクラスの力を実感しました。そして、第１週目では、授業は実施せず、授業を見学させていただいたのですが、「先生の授業はまだ？」と声をかけてくれた時、うれしさと共に授業に対する強い責任感を抱き、第２週目からの授業準備に力を注ぎました。

そして、いよいよ第２週目から授業を行いました。初日、自分なりに満足のいく形で授業準備をしていました。それでも、生徒の反応や机間指導の際にもらった質問から、自分の伝えたかったことが十分に伝わっていないことがわかりました。指導教諭の先生から「授業はLIVEであり想定外のことも起こる」という言葉をもらい、準備も自分が満足のいくものだけでは十分でないということに気付きました。また、生徒が一番教えてくれるということにも気付けました。実際に教壇に立って、共感のうなずきやわからないときの困惑している様子など40人それぞれのリアクションを見たときに、どんなに模擬授業をしても、指導案を書いても得られない「現場での学び」になりました。そして、自分の未熟さを今は受け止め、まだまだ勉強しないといけないと思いました。

最終週、生徒たちとも多くのコミュニケーションを取れるようになり、授業以外の場面でも廊下ですれ違った時、掃除時間など学校生活で生徒たちと過ごすことが心底楽しいと思えるようになりました。そして研究授業でも生徒たちが授業に積極的に参加してくれて、見に来てくださった先生方から授業の雰囲気に多くのお褒めの言葉をいただきました。最終日、生徒からのメッセージにも、「先生の授業わかりやすかった」「先生大好き」など愛のあふれる言葉を多くもらい、教員という仕事に対して改めてやりがいと憧れを抱きました。

この教育実習を通して、多くの学び、経験をさせていただきました。この経験で感じたことを活かし、今後も教員になるために自分をさらに磨いていきたいです。

教育実習の様子

また会おうね

学校教育学科３年　藤　本　菜々美

私は９月１日から３週間、母校である愛媛県の小学校で教育実習を行った。担当は１・２年生の複式学級だった。教員数の激減により、先生方一人ひとりの抱える仕事量は膨大で、多忙な中、実習生である私を受け入れて下さった母校には感謝したい。

私の母校は全校生徒35名の超小規模学校だ。私が在学していた頃から人数が少なく、学校の先生たちは第二の保護者のようであった。毎日様々な会話をし、休み時間は一緒に遊んでくれて、私はそんな楽しい学校が大好きだった。実習初日、不安でいっぱいだったが、「私が小学生時の母校の先生方のように、たくさんたくさん児童の話に耳を傾け、休み時間には児童と精一杯遊び、児童と全力で関わろう」と決め、実習に励んだ。実習の３週間は、全校児童35名と毎朝玄関での「おはようございます」で始まり、正門での「さようなら」で終わる一日の繰り返しであったが、毎日毎日新鮮で違う景色を見ているようだった。同じ時間軸で一日が流れていく中で、泣いたり、笑ったり、怒ったりと大忙しな子どもたちの姿に、私はたくさんのパワーをもらっていた。

実習が進むにつれだんだんと担当クラス、担当クラス外の授業見学だけでなく、最後の研究授業に向けた授業実践が始まった。大学で行ってきた模擬授業は、児童主体と言いつつも、基本的に教師が授業を進め、その中で児童役の学生に発言させたり、活動させたりしていたが、実際の現場は違っていた。実際の授業では教師が教科書をもとに授業を考え、進めるのでは、児童がついてこない。児童の発言を仰ぎ、児童の反応や発言を基に授業を進めなくては、主体的で対話的な深い学びは実現されなかった。１回目の授業実践を経て、児童の予想外の反応に対する切り返しと、板書の仕方が課題だと明確に分かった。授業の流れを予想し、45分間の板書計画を事前に作れていれば授業はねらい通りに進む。その板書計画を基に自分自身が生徒と対話を繰り返し、ねらいに向けて一緒に進んでいく、それが主体的・対話的で深い学びの授業であると経験することができた。また、私は児童の予想外の反応への切り返しも課題だったが、それは自然に克服できた。最後の総評で、「日々児童と全力で関わり合っていたから、児童と先生（私）との間に信頼関係が成立し、その場面、その児童に合った発言や反応を仰ぐことが出来ていたと見ていて感じました、良い刺激をありがとう。」と素敵な総評を頂いて、どれほど日々の子どもたちとの関わりが大切なのか、身を持って経験することができた。

「教師になりたい」という夢を抱くことができたのも、「絶対に教師にならなければ」と背中を押してもらったのも、全て母校のおかげであった。最後のお別れで、泣きながら子どもたちが言ってくれた「２年後また会おうね」の言葉と実習でのかけがえのない思い出を胸に、教員採用試験に向けて頑張りたいと感じた。

２年生国語科「みちあんない」の授業実践

教育実習での学び

学校教育学科３年　今　野　陽加里

10 月上旬から 4 週間、母校の小学校で教育実習を行った。教育実習を通して、教師の大変さや難しさを感じたとともに、児童と関わっていく中でその魅力にも気づくことができ、教師になるという覚悟を決めることができた。実際の現場で授業を行い、児童と関わることでしか気づけないことが多くあり、毎日が学びのある充実した 4 週間であった。そして、授業観察・実践を通して、授業づくりや授業技術についての学びが多かったのはもちろん、教師として児童と関わる中で大切にすべきことを多く学ぶことができた。

まず、児童は自分の鏡ということを学ぶことができた。児童が行動できていない、スムーズに活動に入れていないという時は、教師の伝え方や発問などを改善する必要がある。さらに、児童に楽しんでもらいたい、たくさん考えてもらいたいならば、まずは教師自身が楽しむこと、たくさん発問することが必要である。児童に身に付けさせたいことや大切にしてほしいことがある場合には、まずは教師自身が見本となって行動していくことが必要であると学ぶことができた。

また、自分から積極的に関わっていき、気持ちや愛情を伝えていくことで関係を築くことができると学ぶことができた。感じたことや伝えたいと思ったことは、タイミングを逃さずにその時に伝える。そのためには、児童との関わりの中で常日頃から伝えていくことが重要である。信頼関係を築くことは簡単なことではないが、児童への愛情があれば届くということを 4 年 1 組で 4 週間過ごし、先生と児童との関わりを見る中で理解することができた。この実習を通して、“ひかり先生”と呼んでくれたり、私の授業が楽しみだと言ってくれたりと児童から多くの愛情をもらった。担任の先生に普段から多くの愛情をもらっているからこそ、私にもくれたのだと思う。私も児童に愛情を伝えるため、児童のために何ができるかを常に考えながら児童と接した 4 週間であった。すべての教育活動の根幹には“児童のため“という愛情があり、その愛情があっての指導・支援である。4 週間という短い間ではあったが、愛情をもって接すれば児童にも伝わり、関係を築くことができると身をもって学ぶことができた。

教育実習はやるべきことが多く、あっという間に過ぎていった。しかし、その忙しさも楽しめるほど楽しい 4 週間であった。児童のことを考えながら行った授業準備は、大変ではあったが非常に楽しく、児童が毎日変化・成長していく姿を目の当たりにし、自分も頑張らなければと勇気をもらった。この 4 週間で学んだことや児童・先生方からいただいた多くの愛情を忘れず、今後の勉学に生かしていきたい。そして、2 年後教壇に立てるように、まずは来年の教員採用試験に向けて努めていく。最後に、ご多忙の中、教育実習生として受け入れ、手厚いご指導をしていただいた実習校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいである。

児童からの手紙

教育実習を終えて

地域社会学科４年　村　上　大　暉

私は、令和４年５月31日から６月20日の３週間にわたり、母校の高校で教育実習を行いました。今回の実習では、主に２年生文系クラスの世界史Ｂの授業を担当させていただきました。

教育実習で学んだことについて、授業と生徒対応の２点から振り返りたいと思います。私自身、実習に行くまで教職の授業で模擬授業を行うなど、授業をした経験があったのですが、模擬授業は担当する１度限りで終わってしまうため、単元の連続性には気を配ることができていませんでした。ただ、授業後に指導教諭の先生から単元の連続性に気を配るよう助言をいただいたため、復習を兼ねて話をするだけでなく、次回の単元につながる予習を兼ねた話をするなど、意識的に授業構成を変化させました。全てがうまくいったわけではありませんが、特に復習に関しては生徒からも好評で、一定の成果を得ることができたのではないかと思います。また、査定授業の参観に来られた先生から実践的なご指摘をいただくことができました。実習を通して、生徒の主体性を引き出すような授業作り、働きかけが不十分であると感じたため、来年から始まる教職人生の中で少しずつ改善させていきたいと考えています。

生徒対応に関しては、３年次に履修した教育フィールド研究Ⅲの経験を生かすことができたと思います。教育フィールド研究に参加したことで、生徒から話しかけられるのを待つのではなく、自分からコミュニケーションを取る姿勢を持つことの重要性を実感したため、休み時間や清掃時間、放課後など授業以外の時間を使ってできる限り多くの生徒と話す機会を作りました。ホームルームクラスの生徒だけでなく、１度だけ授業をさせていただいた３年生の生徒に対しても進路や受験勉強について話す機会があり、失敗談を交えながら伝えることができたと思います。また、担任の先生がホームルームで話す機会を作ってくださり、その場で大学生活や高校時代の話をすることで生徒と打ち解けることができたのではないかと感じています。授業を担当させていただいた全ての生徒と信頼関係を築けたわけではないと思いますが、日を重ねるたびに授業に対する意欲も高まっていたように感じたため、これからも授業外の時間から人間関係を作り上げていく姿勢を大事にしていきたいです。

教育実習では、指導教諭の先生をはじめ、地歴公民科や管理職の先生など実習校の多くの先生から指導をいただいただけでなく、遠方の実習先までゼミ教員に派遣指導に来ていただくなど、多くの先生にお世話になりました。実習生として過ごした３週間は、充実した日々であったと同時に毎日が精一杯で、社会人として働くうえでの心身の準備不足も実感しました。そのため、今回の実習で得た様々な経験を今後の教職人生の財産としていけるよう、これからも力をつけていきたいと思います。

最終日にもらった色紙

新任教員紹介

着任のご挨拶

国際教育学科　講師
瀧澤　悠

2022年8月に国際教育学科に着任いたしました瀧澤悠です。3月までは鳥取大学の子どもの発達・学習研究センターで付属小中学校の生徒と保護者を対象としたコホート研究の担当をしておりました。専門は、カウンセリング心理学、教育心理学で、最近の研究では学校教員のメンタルヘルスの生徒のメンタルヘルスの影響、学校教員と生徒のメンタルヘルス支援に着目して研究を行っています。テクノロジーの発展と共に人間の生活はより楽になるのではなく、なぜか子どもや教員を含む日本人の生活はより忙しくなり、心身のストレスが貯まりやすく、心の問題が起こりやすく非常に危機的な社会状況になっておりますので、小手先の医療や心理的支援ではなく、根本的な仕事や生活の改革が必要であると感じています。

趣味は旅行、ドライブ、水族館や動物園巡りです。都留文科大学へ着任してからは、産地直売所で買った地元の野菜を家で料理するのが楽しみになっております。

常に学びを継続して、新しいことを吸収しながら、学生の皆さんと共に成長していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

旅行で訪れた奈良県の東大寺にて撮影

旅行で訪れた島根県の松江城にて撮影

都留文科大学国文学科2022年講演会

高さアクセントのとらえ方
―東京方言・奈良田方言―

開　催：7月6日（水）
講演者：上野 善道 氏

2022年度7月6日に東京大学名誉教授上野善道先生の「高さアクセントのとらえ方―東京方言・奈良田方言―」と題する講演会が実施された。東京方言と奈良田（山梨県早川町奈良田）方言のアクセントを例としながらも、上野先生のアクセント論を初学者向けにわかりやすく解説されていた。

奈良田方言は「言語の島」と呼ばれ、周囲の方言と大きく異なる体系をなしていることで有名である。奈良田アクセントは、ピッチの上昇に弁別的特徴があり、日本語学の概説書に当然のごとく書かれている「日本語アクセントでは、高の箇所（アクセントの山）は1カ所」という法則が通用しない。たとえば2拍名詞第2類（歌・音・川・・・）、第3類（池・犬・山・・・）が［「○¬ ○「▷¬］となる。この奈良田アクセントを見事に整理したのが上野（1977）による理論で、確かに「上げ核」で説明すると体系的に東京式アクセントに属すると説明できる。

上野先生は、東京方言ではモーラに「高」と「低」を指定するのは規定しすぎとして「音調を下げる特徴の有無と位置だけが必要」と動態論の立場をとる。日本語アクセントは、語に決まっている高低の配置（金田一春彦1957）などの静態論で解説されることが多いが、その理論では東京方言の句頭の上昇などを説明できない。上野先生のアクセント論で動態的解釈と並んで中心となる概念が句音調の理論である。句音調は川上秦先生が提示した概念で、例えば「歌が」は［○「○¬ ▷］の2拍目上昇は発話の切れ目を示すとする（川上1961）。

上野先生は、「式（低起式・高起式等）」「核（下げ核・上げ核等）」と「句音調」の理論を発展させて全国方言を説明することに成功した。「式」「核」「句音調」による音調説明は、まさに合理的で科学的である。そして服部四郎先生（東京大学名誉教授・文化勲章）の一番弟子と言われるだけあり、「核」の理論を強調し服部先生のアクセント理論も踏襲されていた。

（国文学科教授 早野 慎吾）

講師紹介

上野 善道（うわの ぜんどう）

1946年岩手県に生まれる。1970年東京大学文学部言語学科卒業。1973年東京大学大学院人文科学研究科言語学専修課程博士課程中退。東京大学助手，弘前大学講師，金沢大学講師・助教授，東京大学助教授を経て，1994年より東京大学文学部教授，2010年定年退職し，東京大学名誉教授。2010－2015年国立国語研究所客員教授。2006年から2015年にかけて，日本言語学会，日本音声学会，日本語学会の会長を務める。専門は音声学・音韻論で，中でも日本語諸方言のアクセント研究が中心をなす。

2022年度英文学会前期講演会翻訳ワークショップ

「かげおとこ」—孤独から出会いへ

開　催：7月13日(水)
講演者：多和田 葉子 氏
　　満谷 マーガレット 氏

2022年7月13日(水)に本学特任教授であり作家の多和田葉子先生と翻訳家の満谷マーガレット先生をお招きし、多和田先生の中編小説「かげおとこ」とその翻訳“The Shadow Man”をテクストとしてZoomを用いたハイブリッド形式のワークショップを行った。事前に英文学会生が両テクストを熟読し、その上で自ら翻訳をしたものをハンドアウトにまとめ、それを多和田先生と満谷先生に講評していただく形式となった。

このワークショップを通して心に残っていることが主に3つある。1つ目は多和田先生が小説について話していたことである。多和田先生は小説は社会の常識が間違っているかもしれないという事を教えてくれることがあると話されていた。また、小説はどんな人でも存在する場所を与えてくれ、どんなにひねくれている登場人物でも好きと言ってくれる人がいると語られており、それを聞いて私はどんな人物にも魅力があり、小説を面白くするための1つの要素なのではないかと考えた。

2つ目は学生の質問に対する多和田先生と満谷先生の返答である。ある学生が多和田先生に主語をどのように決めているのかと質問すると、多和田先生は体の部分を主語にすることを意識していると仰り、1人の人間の身体が勝手に動いてしまう瞬間が面白いと話されていた。主語1つで文章の印象ががらりと変わり、面白みのある文章がもっと面白くなるように簡単に工夫できることが分かり、文章そのものに興味がわくようになった。またある学生は、“Spirit”と“Soul”の違いついて満谷先生に質問した。満谷先生は“Soul”には体が死んでも魂は永遠に生きるというような宗教的な意味があり、また“Spirit”は幽霊などに使用すると説明してくださった。翻訳において、作者の表現や意図を伝えるためにどのような語句を使うか判断するのはとても難しく、しかし、大事なことであると感じた。

3つ目は多和田先生と満谷先生の全体講評である。その中で多和田先生は1つの文章を細かく見てたくさん考えることは難しいがとても良いことであり、実際に翻訳した人に自分の翻訳について聞く機会はめったにないと話された。たくさんの文章を読んで数をこなすことも大事かもしれないが、1つの文章にじっくり向かい合い、さらりと読んだだけでは気づけない何かを発見することは何より自分自身の学びになると感じた。満谷先生は翻訳に挑戦してみることはとても良いことであり、続けると英語ができるようになると仰っていた。これは英語だけではなく、全てのことに言えることであり、どんなことを極めるにも失敗を怖がっていては何も始まらないと感じた。

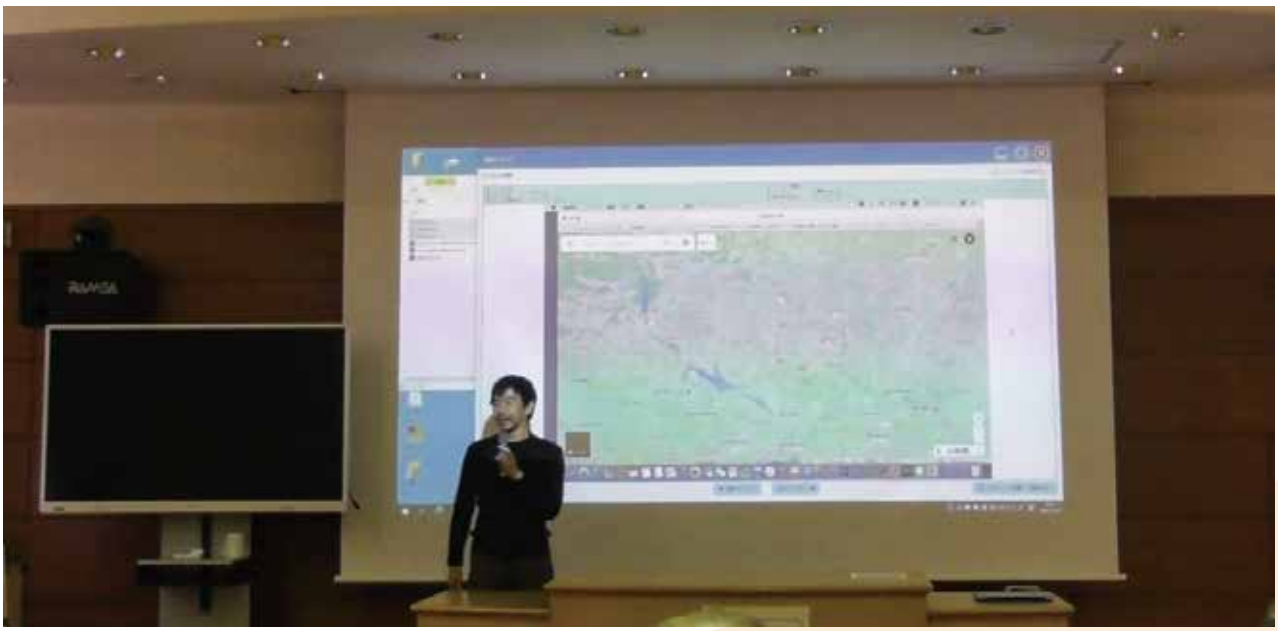
質疑応答では、教授も含めた4名から質問があり、非常に活発なやりとりとなった。今回の講演会は例年以上に学生と多和田先生、満谷先生との対話が活発であり、とても有意義なものであった。小説家と翻訳家に自分の考えを提示する機会などめったにないが、この限られた貴重な時間を通し、それぞれが今後に生かす何かを見つけることができたと思う。

（英文学科3年　石川　将）

講師紹介

多和田 葉子（たわだ ようこ）
東京都生まれ。本学英文学科特任教授。早稲田大学第一文学部を卒業し、ドイツに渡る。チューリヒ大学博士課程修了。93年に『犬婿入り』で芥川賞。その後も多数の賞を国内外で受賞している。主な著書に『雪の練習生』、『献灯使』などがある。

満谷 マーガレット
（みつたに マーガレット）
アメリカ・ペンシルヴァニア州出身。日本文学研究者、翻訳家。ウースター大学卒。東京大学大学院博士課程修了。多和田葉子氏や大江健三郎氏の作品の翻訳を多数手がける。『献灯使』の翻訳 The Emissary が2018年アメリカで最も権威のある文学賞である全米図書賞（翻訳書部門）を受賞した。



都留文科大学国際教育学科2022年講演会　　開　催：11月9日(水)　講演者：横田　徹氏

ウクライナ東部、最前線リポート

2022年の国際教育学科講演会には戦争キャメラマン、ジャーナリスト、ドキュメンタリーフィルムメーカー横田徹氏を招待しました。講演会の主なたテーマは横田氏が見たロシア・ウクライナ戦争の現状です。

(国際教育学科講師　Nordström, Johan Karl)

11月9日に都留文科大学で行われた講演では「ウクライナ東部、最前線リポート」という題名で今年、5月と9月の2回にわたり取材をしたウクライナ東部の現状を映像を交えて報告し、報道カメラマンという仕事をわかりやすく紹介した。

2022年5月のウクライナ取材では東部戦線で任務を遂行する外国人義勇軍のジョージア部隊に従軍取材をして、首都キーウでの新兵訓練、東部の最前線で特殊作戦を行うチームと共にロシア軍の近くに接近してドローンを使って偵察任務を行う作戦に同行することができた。そして戦火の中で生活する一般市民の生活を追いかけた15分の映像作品を上映し、状況説明をした。

そして今年9月にはウクライナ軍がロシア軍から解放したばかりの東部の要所、クピャンスクを取材。ここはロシア軍の兵站の生命線である鉄道2線が交差する要所で、ウクライナ軍がクピャンスクを奪還したことでハルキウ州の要所、イジュームへの補給路が断たれてハルキウ州のロシア軍が総崩れになった。たった数日間で6000平方キロメートルという広大な占領地を奪還したのは戦史に残る反転攻勢だと言われている。そしてイジュームでは400体を超える虐殺埋葬地が見つかり、その埋葬地を取材した。その他、つい数日前にロシア軍が撤退したばかりの陣地に入り、兵士たちの生活状況が残る生々しい現場を撮影した。食料事情が補給も乏しく、陣地に放置された大量の武器や砲弾から慌てて撤退したことを物語っていた。

最後には留学生を含む学生や先生からの質疑応答があり、とても充実した講演となった。近年ではネットやSNSによって最新のニュースや情報を知ることができる便利な時代になったが、その反面、フェイクニュースや情報操作などの弊害などもあることから、実際に現地に行って現地の人の話を聞いて、自分の目で事実を確認することが不可欠だと実感した。

(横田　徹)

講師紹介

横田　徹（よこたとおる）

1971年、茨城県生まれ．フリーランスの報道カメラマンとして1997年のカンボジア内戦から紛争地を専門にスチール撮影、ドキュメンタリー番組の製作を手がける。
2000年からインドネシア政変、東ティモール、コソボ紛争、パレスチナなどを取材。
2001年にはタリバン政権時のアフガニスタン、その後2007年～2012年までアフガニスタンに展開するアメリカ軍を継続的に従軍取材。
2014年、イスラム国の拠点ラッカを世界で初めて取材。
2015年2017年、イスラム国と戦うイラク政府軍、クルディスタン武装組織「ペシュメルガ」「PKK」に従軍、イラクの北部のモスル攻防戦を取材。
最近では2022年5月、ウクライナ東部の最前線を取材．ウクライナ軍の外国人義勇兵部隊の一つ、ジョージア部隊の従軍取材は5月22日、29日に日本テレビ「バンキシャ」で放送された。

第18回　地域交流研究センターフォーラム

つながり、学び、生きる

開　催：11月2日(水)
登壇者：森　康行 氏、澤井 留里 氏
関 美江子 氏

11月2日（水）に、第18回地域交流研究センターフォーラム「つながり、学び、生きる」を開催しました。一般・大学教員・本学学生あわせて55名に参加いただきました。

第Ⅰ部は夜間中学を題材とした映画「こんばんはⅡ」（2019年）の上映会、第Ⅱ部は同映画の森康行監督、「全国夜間中学キャラバン」より澤井留里さん、関美江子さんにご登壇いただき、クロストークを行いました。

クロストークでは、映画に登場する「学ぶことは、生きのびること」という学習者の言葉の背景や、登壇者がこれまで夜間中学に携わるなかで出会った「腰で深い雪を掻き分ける様にして前に向かって学ぼう」とする学習者の姿が語られました。夜間中学の存在は知りながらも家庭の状況からすぐに通うことができず、電車から見える夜間中学の看板を「あそこでいつか学ぶのだ」と数十年見つめつづけてやっと入学してきた生徒もいたというエピソードには、学びを奪われた人々が再度学びへつながることの困難さと同時に、学びが生きる希望にまでもつながることを感じました。

参加者からも「夜間中学への最初のきっかけをつくるために、どのようなことをしているか」、「様々な背景をもつ生徒と関わる際に、気をつけていることはあるか」など次々に質問が出され、充実したフォーラムになりました。

（学校教育学科講師　邊見　信）

登壇者紹介

森　康行（もり　やすゆき）
数多くのドキュメンタリー映画を監督し、映画賞受賞も多数。第1作「こんばんは」（2003）に続いて本日上映の「こんばんはⅡ」を監督し、夜間中学の周知のため各地で講演も。ほかに当時93歳の教育学者大田堯を描いた「かすかな光へ」など。

澤井 留里（さわい　るり）
東京都で小学校の音楽専科教師を12年間務めたのち、中学校に異動。40代で荒川区立第九中学校の夜間学級に。墨田区立文花中学校もあわせて、21年にわたり夜間中学に勤務。

関　美江子（せき　みえこ）
日本語教師。1986年～2021年に企業・大使館で日本語研修、2011年～21年には神奈川県の公立高校で外国につながりのある生徒のための日本語クラスに携わる。2015年より自主夜間中学「えんぴつの会」（東京都墨田区）スタッフ。2021年4月「鎌倉えんぴつの会」開設。代表。

ツルブン写真部 × 都留市企業版ふるさと納税

写真部では各々が自由に好きな写真を撮影し、部員同士で鑑賞し合うことはもちろん、カメラの使い方や撮影者としての心得というように1歩踏み込んで「写真」と向き合っています。今年度は企業版ふるさと納税（人材派遣型）制度で株式会社ニコン日総プライムから都留市に派遣されている、石井弦一郎参与との交流も行いました。

10月4日、11日の2日間、石井さんを講師としてお招きし、株式会社ニコン日総プライムでの勤務経験や、学生時代からの趣味である写真撮影のご経験から、撮影技法や写真撮影のマナーに関してのお話と、部員が撮影した写真の講評をしていただきました。特に写真撮影のマナーについては改めてしっかりと考えることができてよかったと思います。そしてカメラや写真を知り尽くした方からのアドバイスは大変勉強になり、有意義な時間となりました。石井さんのお話をお聞きしてじっくり作品を鑑賞しながら、撮影者はどうしてこのような写真を撮影したのだろうかとみんなで考えることで、同じ1枚の写真でも見る人によって変化する写真の表情をうかがうことができ写真の奥深さを感じることができました。

石井さんによる写真講座、通称「石井ゼミ」の様子

活動紹介

写真部では毎週火曜日の部会において活動報告や部員同士の交流を行っています。写真を通して自分の好きなものについてだれかに話すことができるのは写真部ならではです。部活動内の主なイベントとして部旅行があります。部員で行き先や撮影したいものを決めて計画を立て撮影に行き、後に写真を共有します。同じ目的を持つ仲間と撮影に行くことができるので楽しく、他の人の写真を鑑賞する中で自分では気づかなかった撮り方を知ることができ、撮影技術を上達させるよい機会となります。また、自分が撮ってみたいと感じる写真が増えていくところも部旅行のよいところです。撮りたいと思う場所が被った時には部旅行以外でも声をかけ合い共に撮影しに行く部員たちもいます。

この他にも写真部では、他部活やサークル、講演会、学報の撮影依頼を受けています。部員は個人的な写真撮影から提供用の写真撮影まで幅広く活動しているので、ぜひお声掛けください！

＜木暮　尊＞
「裏山から望む本部棟」

楽山公園からの撮影です。今年の春は気候が比較的おだやかで花見にはちょうど良い天気が続きました。写真奥には三つ峠も望め、文大周辺の春の風景を一枚に凝縮することができたと思います。

＜福原裕太＞
「夜空に降り注ぐ花火」

河口湖の湖畔からの花火です。日が落ちて間もない時に、対岸から見える花火は河口湖の夏の風物詩と言えます。

ウクライナ避難民支援から見た絶望と希望

比較文化学科４年
蟹沢川 荘

2022 年 2 月、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、隣国へ避難する人はいまだ終わる所を知らない。その避難民を支えるために、私は日本財団ボランティアセンターの学生派遣事業に参加し、日本を出発する。活動場所はウクライナ国境近くに位置するポーランド南東部プシェミシル。ウクライナの国境を越えて最初に停車するターミナル駅がある地域である。私はそこで避難民の荷物を運びや駅構内の案内、ごみ拾い、一時滞在施設の開設準備などを行った。

いつ祖国に戻ることができるか分からない中、避難民の荷物は「人生そのものがつまっている」といえるほど重く、ロシア語もウクライナ語も話せない一介の学生である私が人生を変える支援ができるのかと問われると、「否」に限りなく近い答えになってしまう。整っているとはいえない髪や服の様子、ボロボロのスーツケースは状況の深刻さを物語っているように思えた。そんな中で見たのは、極限状態の中で大切な誰かと手を取り合って懸命に生きようとする姿である。異国からの自分に対してキラキラの笑顔で手を振り、多くの方が「ジャクユー（ありがとう）」と言ってくれる。国際情勢を前に「自分には何ができるのか」と問い続け、無力感を感じるかたわら、現地の人は必死に力になろうとする私たちの姿を見てくれているように感じる。遠い国の学生が隣に立つことで、避難民に少しでも勇気を与えることができたのなら私たちが現地に行った意味があるのだと思う。結局、人と人は直線的につながるのではなく、心と心でつながるということである。避難民 1000 万人以上、死者数 1 万人という数字を目にするが、ひとりひとりが優しさや愛にあふれ、多様なバックグラウンドを持つ。それが積み重なって膨大な数字になり、戦争は起こっているが、そこには人がいて多くの感情が存在するということを伝えたい。

ウクライナから避難する果てしない道のり

現地で活動したメンバーとともに

日本に帰国し、今まで以上に世界情勢にアンテナを張るわけであるが、それらは対岸の火事であるのだろうか。一見遠く思えるウクライナの悲劇が、日本の穀物、肥料を高騰させている。さらに、中国台湾の緊張の高まりに対して日本は無視することはできない。この文章を読んだ方には、少しでも世界の出来事に思いをはせていただきたい。

ポーランドで過ごした日々は今でも目を閉じると昨日のことのように思い浮かぶ。

第71回　関東甲信越大学体育大会

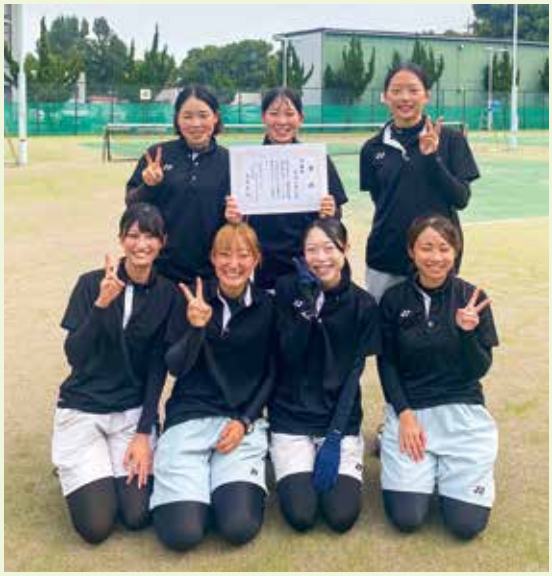
関東甲信越大学体育大会は、関東近郊の国公立大学で作る関東甲信越大学体育大会協議会が主催する大会であり、本学は平成16年度から加入し大会へ参加しています。

3年ぶりとなった第71回大会は新型コロナウイルス感染症の拡大が続く中での開催となりましたが、各大学の学生・教員・職員や、各競技団体の協力のもと感染症対策を徹底し、本学も男女バレーボール競技、準硬式野球競技を当番校として、無事に開催することができました。

本学からは11競技に150名の学生が参加し、埼玉県、群馬県、山梨県の各会場にて熱戦を繰り広げました。大会結果としては、「女子バレーボール競技準優勝」、「女子剣道部団体戦優勝」、「女子ソフトテニス部　個人ダブルス優勝　団体戦準優勝」「柔道部男子　81kg級個人戦優勝」など素晴らしい成績を収めました。おめでとうございます。

本学出場競技
陸上競技
バスケットボール
水泳
準硬式野球
バレーボール
空手道
ソフトテニス
剣道
柔道
弓道
バドミントン

剣道部　女子団体戦優勝


女子ソフトテニス部　個人ダブルス優勝・団体準優勝

女子バレー部　準優勝

第67回 桂川祭開催

1日目、開会式でのバルーンリリースの様子

桂川祭の対面開催は3年ぶりでしたが、開会式のバルーンリリースには多くの方にご参加いただきました。ステージパフォーマンスでは出場団体の溌剌としたパフォーマンスが行われました。1日目にはレジンを使った小物作り、プリン屋さん、プラネタリウムをみられる星を見る会が行われました。2日目はスノードーム作り、綿あめ、教室を使った脱出ゲームが行われました。3日目にはお笑い芸人のアイロンヘッドさん、カミナリさん、キンタロー。さんの三組をお呼びし、爆笑ライブを行いました。三日間を通して行われたスポーツ祭典では、学生の生き生きとした姿を見ることが出来ました。またビンゴ大会、練り香水作り、出店団体の頂点を決める出店王決定戦、スポーツ祭典の優勝団体などを表彰するスポーツ祭典表彰式が行われました。そして出店も規制の中ではありましたが行うことが出来、多くの笑顔を目にすることが出来ました。最後には花火が打ち上げられ、桂川祭の幕を閉じるのにふさわしい物でした。

こうして無事に開催できたのも、ひとえにお力添えをいただいた多くの皆様のおかげだと思っております。この場を借りて御礼申し上げます。皆様にとって心に残る3日間でありましたら幸いです。ありがとうございました。

最終日、盛大に打ち上げられた花火

実行委員長挨拶

桂川祭実行委員会委員長
池上雛姫

第67回桂川祭のテーマ『萌芽』は新型コロナウイルス感染症により、2年間桂川祭の対面開催が中止となっていたことを受け、年を経て温かく芽吹く様子をたとえたものになっています。入学してから新型コロナウイルス感染症に全てを左右されてきた学年が中心となって運営をするということに不安はありましたが、多方面からご尽力を賜りまして無事開催することができました。ありがとうございました。様々な経験をすることができ、やりがいを感じられました。来年度の桂川祭もよろしくお願いいたします。

2022年度

夏季オープンキャンパス開催報告

8月6日（土）及び7日（日）、夏季オープンキャンパスを事前予約制かつ来場者数を限定し、来場形式で実施しました。実施内容は、大学概要説明、キャンパスライフやキャリアサポートの紹介、キャンパスツアー、学食体験等、そのほか各学科における学科説明や個別相談はオンライン通話ソフトZoomを併用して実施しました。

このような内容で開催した結果、8月6日（土）は1,064名、7日（日）は1,041名、計2,105名の参加があり、開催内容及び来場者数共にコロナ前の水準に近づいてまいりました。特にキャンパスツアーや図書館ツアー、保護者説明会には、両日とも約400人の参加がありました。

アンケート結果によると、来場した高校生の67%が高校3年生、33%が高校2年生でした。本学に興味を持った理由を尋ねると、高校生にとっては「興味がある学部・学科があるから」「教員志望だから」の2点が他の選択肢を引き離して多数を占めました。高校生にとって、志望校を決める上では「カリキュラム·授業内容」「取得資格」「学費」「就職」の順に重要視していることを見てとることができます。アンケートの自由記述からは、会場での教職員・学生の丁寧な対応、本学への志望動機の高まり、といった肯定的な意見が大半を占めました。

今年度は初めて春·夏の開催でした。準備・運営に快くご尽力をいただいた教職員、学生スタッフ、広報委員の皆様、ありがとうございました。

（広報委員長 鈴木健大）

キャンパスツアー受付の様子

キャリア支援センターによる進路相談の様子

特別講義の様子

成績優秀者表彰式

7月27日（水）に、昨年度（令和3年度）、学内において優秀な成績を修めた学生を表彰する「成績優秀者表彰式」が行われました。

対象となった国文学科16名、英文学科16名、比較文化学科15名、国際教育学科6名、学校教育学科15名、地域社会学科16名の計84名が表彰されました。式典では、藤田学長からお祝いの言葉を頂き、続いて表彰状が授与されました。

また対象者には、平成26年度より創設された「成績優秀者奨学金」が給付されます。

前期修了者卒業式

9月21日（水）、本部棟3階大会議室において、令和4年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は10名の学部卒業者のうち、4名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、藤田英典学長より一人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。

都留文科大学附属小学校の児童が都留文科大学を見学！

ムササビの標本を見学

学長室訪問

11月7日（月）、都留文科大学附属小学校の児童34名が都留文科大学を訪れ、加藤敦子副学長による大学の説明や特別講義、キャンパスツアーを通し、大学の雰囲気を体験しました。

語学教育センターのDelgrego,Nicholas Dirk准教授による特別授業は、国際教育学科の留学生5名を交え、全て英語で行われました。低学年は英語のミニ本を作成したり、高学年は自分の好きなもの・嫌いなものを英語で表現してみたり、ネイティブ教員による生きた英語を学びました。

キャンパスツアーでは、学長室を訪問し、藤田英典学長と交流したり、地域交流研究センターで動物の骨や貴重なパンダのフン、ムササビの標本などを見学したりしました。加えて、高学年はOlagboyega, Kolawole Waziri教授や山辺恵理子准教授の授業やゼミの様子を見学しました。

市民公開講座を開催

日程	講座名	講師
7月9日（土）	湧水さんぽ	学校教育学科　内山美恵子 教授
7月23日（土）・27日（土）	ムササビ観察会	地域交流研究センター　北垣憲仁 教授
7月24日（日）	佐野夢加かけっこ教室	地域交流研究センター　佐野夢加 特任講師
9月29日（木）	星空講演会	学校教育学科　内山美恵子 教授

7月9日（土）に行われた「湧水さんぽ」当日は、本学の地域交流研究センターでの日程説明の後、東桂駅まで移動し夏狩地内の太郎・次郎滝や長慶寺の湧水に群生している「梅花藻」、十日市場地区では永寿院の湧水池などを観察しました。

7月23日（土）、7月27日（土）の2回、本学地域交流研究センター長北垣憲仁 教授の「ムササビ観察会」が開催されました。この講座は、市内東桂地区の今宮神社境内に生息するムササビを、北垣教授と本学学生が観察のガイドとミニ講座を行う観察会で、本学の公開講座の中でも特に人気の講座のため、今回の企画だけでなく晩秋にも複数回開催することとなっています。

7月24日（日）の「佐野夢加かけっこ教室」では、親子での準備体操や走る基本となるスキップやマーカー走などを通して走ることの楽しさを学ぶとともに、親子でのふれあいの機会の増進を図るものとなりました。

9月29日（木）には「星空講演会」を開催しました。この講座は、本学自然科学棟の屋上天文台施設を使い木星や土星などを観測する「星空観察会」として開催する予定でしたが、当日日中は小雨模様で、開催時間帯にも曇り空であったため、急遽「講演会」に変更しての開催となりました。

湧水さんぽ

ムササビ観察会

佐野夢加かけっこ教室

星空講演会

山梨県中堅教諭等資質向上研修合同企画
「現職教員教育講座」を開催

地域交流研究センターでは、7月25日（月）に自然科学棟1階S1教室において、受講定員を設けたうえで「現職教員教育講座」を開催しました。本講座は、山梨県総合教育センターの中堅教諭等資質向上研修にも指定されており、県内の小中学校・高校・支援学校から延べ61名の現職教員の方々が受講されました。

当講座は午前・午後の2部に分かれており、午前の部では学校教育学科 山本　剛 特任教授が『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』について、午後の部では教職支援センター 宮下 聡 特任教授が『道徳性の涵養』についてを、それぞれ担当され講義が行われました。

子ども公開講座を開催

都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と連携し、都留文科大学「子ども公開講座」を７月下旬から９月下旬にかけて開催しました。

地域交流研究センターでは市民公開講座などの成人向けの講座ばかりではなく、本学の知的資源を生かした子ども向けの公開講座も多数開催しています。コロナ感染症が拡大傾向である第七波の中においても安心安全な環境管理のもとに開催することができました。

日程	講座名	講師
７月17日（日）	ロンドンオリンピック選手と走ろう！	地域交流研究センター 佐野夢加 特任講師
７月30日（土）	木を使って工作をしよう！	学校教育学科 竹下勝雄 教授 地域交流研究センター 青木宏希 特任教授
７月31日（日）	陶芸にチャレンジ	学校教育学科 山本直紀 特任教授
８月16日（火）	色の不思議 ～カラフルレインボータワーを作ろう	学校教育学科 山田暢司 特任教授
９月３日（土）	ユーチューバーになろう！	国文学科 野中　潤 教授
９月24日（土）	手作り石けんやキャンドルを作ろう	学校教育学科 平和香子 准教授

ロンドンオリンピック選手と走ろう！

木を使って工作をしよう！

陶芸にチャレンジ

色の不思議
～カラフルレインボータワーを作ろう

ユーチューバーになろう！

手作り石けんやキャンドルを作ろう

文大名画座 ～名画の上映とトーク～

７月 29 日（金）午後６時 30 分から本学２号館 101 階段教室において、二年半ぶりとなる文大名画座が開催されました。

文大名画座は本学教員を広く市民の皆様に紹介するとともに、教員自身がお勧めの映画を上映し、その「想い・エピソード」を語る企画で、今年度はコロナ感染症への対策を講じたうえで、高畑勲 脚本・監督のアニメーション映画『セロ弾きのゴーシュ』を上映しました。

解説を務めたのは、令和３年度から本学に着任した国文学科吉田恵理 専任講師で、映像化が困難と言われた宮沢賢治の世界観などについて、個人的見解を含むわかりやすい解説で、作品の紹介を行いました。

デジタルと「図書館」の未来

日向 良和

須賀川市民交流センター tette

私の研究テーマは図書館・情報学で、「図書館」とよばれるシステムの維持、発展が人類の発展に寄与するという前提のもとにその方法などを考えています。その「図書館」ですが、社会の中でさまざまな情報がデジタルデータになり、インターネットでやりとりされるようになったことで大きな変革点にきています。具体的には図書館が保存、提供してきたさまざまな資料がデジタル化され、場所時間を問わず利用できるようになったことで、あちこちに図書館がある必要性が薄れました。また、大学の講義などでネット情報のあやふやさを話しても一般生活上ではネット中心になりつつあります。そんな中で「図書館」というシステムはどうあるべきかが大きな課題となっています。図書館は利用されなくなりつつあり、小説などの娯楽目的での利用もデジタルコンテンツの利便性や多様性に押されています。この文章を書いている翌日、私は図書館を減らす会議に出席します。これまで身近な場所にあった方がよかった図書館を減らさざるをえない時、その地域ではどのような活動拠点や場が必要となるのかが大きな課題です。文字や映像のコンテンツはデジタル中心に利用が移ったとしても、身体的な移動やコミュニケーションは完全なバーチャルリアリティができるまでは、人間が生きる上で重要なファクタと考えます。それらの場としてかつて「図書館」とよばれた場所が利用されるのか。そしてその場には何があって、何がなくなるのかについて住民自身が考える時代となっています。そのお手伝いをすることがこれからの図書館員の役割かもしれません。

ぶんだい堂

進駐軍を笑わせろ！
米軍慰問の演芸史

青木深 著
2022 年 10 月発行
平凡社

◇青木　深
比較文化学科 教授

多様性×まちづくり インターカルチュラル・シティ
欧州・日本・韓国・豪州の実践から

山脇啓造・上野貴彦 編著
2022 年 8 月発行
明石書店

◇上野　貴彦
比較文化学科 講師

公立大学法人 都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1
☎0554-43-4341
URL：https://www.tsuru.ac.jp/

都留文科大学報　第 150 号　2022 年 12 月 2 日発行

都留文科大学広報委員会
鈴木健大（委員長）・日向良和（副委員長）・加藤敦子（担当副学長）・野口哲也・加藤めぐみ・上野貴彦・Nordström, Johan Karl・加藤 優・三澤知貴（経営企画課長補佐）・安富博史（企画広報担当）・天野麻由（企画広報担当）